

『景德傳燈録』から『五燈會元』へ

—— 禪宗の變遷と燈史の編集 ——

ウイッテルン, クリスティアン

はじめに

周知のとおり、『景德傳燈録』の開寶藏への入藏 (1011 年) 以降, この本は燈史の典型となって, 相次ぎ増編や續編が編纂される。そうしてタイトルにある「傳燈」から「燈史」という名前のジャンルが登場した¹⁾。『景德傳燈録』の次に出るのは『天聖廣燈録』(1029 年) であり, 1204 年までの凡そ 200 年の間に合計 5 つの燈史が登場する。さらに五十年後, 1252 年にその 5 つの燈史の総合的な纏めとして『五燈會元』が編纂されて, 後に『景德傳燈録』と並んで, 最も讀まれた燈史となった。本稿では『五燈會元』の構成と内容から前者の『景德傳燈録』を始めとする他の燈史との違いを通じて, この間に禪宗に起こった變遷に焦點を當てる, つまりこの 250 年の變遷プロセスがこの六つの文獻から讀み取れるかの檢證するが目的である。この問題については先行研究が少ないが²⁾, 今回は電子テキストを用いて, テキスト分析の試みとして取組んで行く。

比較の方法としてはそれぞれの電子テキストを用いて, 「句」ごとに對應する他のテキストの句を見つけ出し, そうして前後のコンテキストから該當の箇所が本當に對應するかどうかを判斷する。このアルゴリズムは以下により詳しく説明する。そうして, この句毎の對應表を以ってより詳細に分析することとする。

1) 禪研究では古くからこの名稱が使われているが, 決してここでは歴史的な事實のみを伝える事を意味する譯では無い。この點について柳田聖山『初期禪宗史書の研究』(京都, [1967] 柳田聖山全集 6, 2000), p. 19, または石井修道「大慧宗杲とその弟子たち (一) ——『五燈會元』の成立過程と關連して」印度學佛教學研究 通號 36, 1970, pp. 332-334 を參照。

2) 上記の石井修道 (1970) の論文と陳垣/西脇常記, 村田みお譯『中國佛教史籍概論』(北京 1962/京都 2014) の卷 4, pp. 193-205 に挙げられている。

第一節 對象典籍

まずは比較對象となる文献を簡単に紹介する。これらの典籍の多くは完成後すぐ入蔵され、間も無く日本にも傳わり出版された。

(一) 景德傳燈錄

『景德傳燈錄』三十卷は法眼宗の天臺徳韶國師(891-973)の法嗣である永安道原(生没年不詳)によって編纂された³⁾。翰林學士楊億(974-1021)⁴⁾は、工部員外李淮、太常丞王曙と共に校正して入蔵を測り、1011年に開寶藏として刊行され、廣く讀まれるようになった。表3-1に内容の概要を擧げている。楊億は序の中でも強調している通り、この傳燈錄は法嗣の概念に基づいて禪宗の全體を示す事が目的である。そのため六祖慧能以降は南嶽懷讓とその法嗣の第九世まで擧げてから、同じ様に六祖慧能の弟子とされる清源行思とその法嗣第十一世まで羅列する。この事によって同時代の禪師は本の全く違ふ所で登場するようになるので、明らかに歴史的な順序より法系中での位置づけが重視されている⁵⁾。實際に項目を立てて、傳記や問答を擧げられている禪師は981人であるが、法系圖上に名前だけ擧げられている禪師を足せば合計1701人になる。この事からも法系を重んじる見方が見られる。しかし道原の原稿からこの形になっていたか、或いは楊億が『景德傳燈錄』の編集の段階でこの構造を導入したかは知り得ないが、この形で世に出て、後の世代に影響を與えたので、『景德傳燈錄』が描いている禪宗の全貌として認めることとする。

(二) 天聖廣燈錄

『天聖廣燈錄』三十卷は天聖七年(1029)駙馬都尉の李遵勗(988-1038)⁶⁾によって編纂され、1036年に入蔵される。入蔵の際に宋仁宗の序が追加されている。この著作の構造は『景德傳燈錄』に似ており、同じ古佛からインドと中國の祖師への流れを描き、同じ

3) 文献學的な考察は椎名宏雄(編)『五山版中國禪籍叢刊』(京都、2012)、第1巻、「解題」pp. 793-802を参照。

4) 本傳は宋書(巻305, p. 10079)を参照。

5) 現在のテキストには479年から618年までの年譜が掲載されているが、これは南宋の重刊本に追加されているし、唐代以降の事は記録していないので、歴史を重視する證據ではない。

6) 『嘉泰普燈錄』23, 309a, 『五燈會元』12, 723。臨濟宗谷隱聰禪師の弟子、宋太宗七女に嫁。

様に南嶽懷讓と清源行思をそれぞれの法系のトップに書くが、本書は各系統が一回交代する形になる。しかし、一番大きな違いとしては、本書は百丈懷海と臨濟義玄の語録の全體を卷九と卷十一にそれぞれ載せている事が挙げられる。内容構成は表 3-2 を参照。これは天聖年間の臨濟宗の影響力の痕跡でもある。規模は『景德傳燈錄』より小さく、合計 339 人の傳記が挙げられているが、『景德傳燈錄』と違って禪宗に縁の有る禪宗以外の高僧や文献が無い。

(三) 建中靖國續燈錄

『建中靖國續燈錄』三十卷は雲門宗の佛國惟白（生没年不詳）、圓通法秀（1027-1090）の法嗣によって編纂され、1101 年に徽宗の序付きで入藏する。本書の構造は『景德傳燈錄』『天聖廣燈錄』とは大きく違い、五部の「門」からなる、すなわち「正宗門」、「對機門」、「拈古門」、「頌古門」と「偈頌門」（内容構成は表 3-3 を参照）である。これは機縁問答を役割別に並べているが、大部分を占す對機門の中身はやはり南嶽懷讓と清源行思の法系に分かれている。しかしそれも何回も交代する形になるので、以前の様な法系の重視の側面はやや薄くなっており、間もなく登場する公案集との共通點は否定出来ない。ただタイトルからしても傳燈錄の繼承を計る事と法系の配列が残されている所は注意すべき點である。「對機門」には 863 人の傳記が見え、本書の大部分を爲すが、「拈古門」などにも他の燈史の傳記に見られる問答がある。

(四) 聯燈會要

『聯燈會要』三十卷は臨濟宗の木菴安永（1115-1173）の法嗣（大慧下三世）、泉州崇福寺の住持であった晦翁悟明（生没年不詳）によって編纂され、1183 年に完成した⁷⁾。他の燈史と違って、ここは禪師の出身地、出家、巡禮、師との出會いなどの傳記的な情報は殆ど挙げられず、機縁問答になるものだけに焦點を絞る（内容構成は表 3-4 を参照）。これも佛果圓悟（1063-1135）の『碧巖集』（1125 年）を受けて、公案集へのシフトの一環に位置づけられるだろう。タイトルに有る様に、今までの燈史『景德傳燈錄』、『天聖廣燈錄』を受けて、さらに後の禪師の記録を足した形になると言われているが⁸⁾、實際は兩燈史から採録されている文句はそれほどの頻度でもない。

本書は五燈史の中で唯一入藏されない典籍で、現存最古の版本は宮内廳本である。基

7) 現存の版本の文獻學的な紹介は椎名宏雄（編）『五山版中國禪籍叢刊』（京都、2014）、第 2 卷第 1 冊、「解題」pp. 567-578 を参照。

8) 佛光禪藏『聯燈會要』、高雄 1994、聯燈會要解題 p. 1。

『景德傳燈錄』から『五燈會元』へ

本的な構造は『景德傳燈錄』に似ており、古佛からインドと中國の祖師を擧げて、そうして同じ様に南嶽懷讓と清源行思の法系を別々な配列で擧げている。そして禪師の著作を付録の様な形で載せて有る。本書は燈史で初めて「太宗皇帝」の項目を立てて、次の様な問答を幾つか擧げている：

『聯燈會要』卷29：「大宋太宗皇帝。問僧。看甚麼經。云仁王經。帝云。既是寡人經。因甚麼。在卿手裏。僧無對。(雪竇代云。皇天無親。惟德是輔。)」(新纂續藏經, 第79冊, p. 258)

宋の太宗皇帝は僧に聞く：「どんな經典を讀んでいるか？」僧は答えた：「仁王經です」皇帝は云う：「これは私の經ではないか？なぜお前の手に有るか？」僧は答えられなかった。(雪竇禪師は代わって云う：「皇天は愛着を持たない、徳の有る者のみ助ける⁹⁾」)

明らかにこうした問答が実際に行われた可能性は無いが、ここで禪宗は宋代の國家勢力に對して形の上で自立を示す狙いが有るだろう。その後の燈史にもこうした傾向が見られる。

(五) 嘉泰普燈錄

『嘉泰普燈錄』三十卷は雲門宗の僧侶雷菴正受(1147-1209)、淨慈道昌(1089-1171)の法嗣によって編纂された¹⁰⁾。本書も燈史の基本的形を繼承して、未登録の言葉を集めて、前記の訂正も入れている。また、禪師の僧侶に加えて帝王、公卿、師尼、道俗などの重要人物も収録されている所からタイトルに「普」をつけて、禪宗のさらなる廣がりを強調している。構成は示眾(提唱)と機語(問答)の二十一卷の後、宋の皇帝、士大夫と道師の問答を擧げている。ここにも禪師の著作を分類して卷二十五から三十まで収録している(廣語、拈古、頌古、偈贊、雜著)。

(六) 五燈會元

『五燈會元』二十卷は従來、臨濟宗楊岐派に屬し、澗翁如琰(徑山如琰、佛心如琰1151-1225)の法嗣である大川普濟(1179-1253)の編纂とされる¹¹⁾。しかし、佐藤秀孝¹²⁾が指摘した通り、この情報は業海子清(生没年不詳)の元重刊本の序によるもので、佐藤氏

9) 『尚書』、蔡仲之命の引用。

10) 上記の椎名(2012), pp. 802-811を参照。

11) 柳田聖山『禪籍解題』(禪家語錄II, 西谷啟治と柳田聖山編(東京, 1974, pp. 445-514) no. 144, p. 479. 陳垣／西脇常記, 村田みお譯『中國佛教史籍概論』, 京都, 2014, pp. 193-205. 文獻的な紹介は上記の椎名(2014), pp. 579-588を参照。

12) 佐藤秀孝〈『五燈會元』編集の一疑點〉, 『印度學佛教學研究』58, 1981, pp. 114-115。

の考察では、大川普済は靈隱寺の住持の際、亡くなる直前に本書の編纂を行ったが、むしろ靈隱寺の僧侶達を中心となって実際の編集作業がした可能性が高い。そのために、本書は當時の影響力のある寺の禪宗に対しての一般的な認識を表すものとして位置づけられる。

以上が今回分析対象となる文献の概要である。表1には數字化された字數や句數の基本情報をあげる（最後の2欄に付いては後に言及する）。

表1 対象テキストの基本情報

タイトル	總字數	字種	總句數	平均長	マッチング句	%
景德傳燈錄	465125	4235	77460	4.46	34032	43.94
天聖廣燈錄	242659	3493	40444	4.50	7031	17.38
建中靖國續燈錄	316296	3780	52932	4.52	8277	15.64
聯燈會要	411522	3658	65017	4.46	21214	32.62
嘉泰普燈錄	321608	4295	50891	5.05	21353	41.96
五燈會元	694655	4595	125794	4.42	n/a	n/a

第二節 比較手順のアルゴリズム

ここでは『景德傳燈錄』と『五燈會元』の出版の間に有る約250年に禪宗に起った變遷が如何に反映しているか、或いはこの二つの著作に内蔵している、禪宗に対しての見方を明確化する事が目的である。そのためにこの二點の禪錄のみならず、その期間中に編纂された、『五燈會元』の基礎となる五つの燈史を『五燈會元』の本文と比較して、その違いの分析を通して何處がそして何が變わったのかを明らかにする。

この比較は対象典籍の電子テキストを用いて行なう。比較は複数のレベルで行うが、一番根本的には「句」の単位での比較とする。「句」はここでは言語學的な定義というよりも句讀點の間の文字列を指し、便宜的にこの分析に使う事にする。こうした句は対象テキストでの平均長さは4字から5字程度である。ここで使用する電子テキストは「禪佛教研究知識ベース」のプロジェクトの一環で作られているテキスト¹³⁾である。しかしながら、本當に意味の有る比較を得るために、テキスト構造に見られる違い、特に各禪師の傳の全體とそれぞれの禪師の法嗣における同異も考慮する。

各テキストの「句」に関する基本情報は「表1」を参照。

「句」の間の對應關係は次のアルゴリズムで得る。

13) 『五燈會元』の底本は中華書局の校訂本、それ以外は續藏經のテキストを用いるが、句讀點は佛光大藏經の禪藏を参照しながら獨自に作成した。

『景德傳燈錄』から『五燈會元』へ

- ・『五燈會元』の各「句」から先ず n-gram を作成する。今回は 3-gram を用いる。例えば 5 文字の句「如何是此心」から 3 字の文字列を三本（「如何是」、「何是此」、「是此心」）を得る。それぞれの n-gram を対象テキストの全てからマッチ對應する句を見つけ出し、その句を記録する。しかし長さが 3 文字以下の句（「師曰」、「僧問」などの比率の高い、特定性の極めて低い句）を除外する。
- ・一句の n-gram の過半数が同じ句にマッチすれば、その句を假のマッチとする。
- ・『五燈會元』の全ての句の處理を終えたら、假マッチから實際のマッチを絞る。その爲に假マッチの有った句の前後の句に對してコンテキストを配慮したスコアを計算する。前後の 5 句を以って假マッチのスコアを計算して、各テキストからスコアの最も高い假マッチを對應句とする。これによって違うコンテキストにある類似な表現を除外する。
- ・次は對應句の連続性を確認する爲に、連続的なマッチを集め、そこで間の空白を埋める。その空白は上記處理から外した 3 文字以下の句や、表現或いは漢字使いに少し差が有る事によって生じる。場合によって點の付け方の違いで對象する句が合併されたり、分割されたりする差も有るが¹⁴⁾、この段階の處理ではそれもマッチと見なす。
- ・最後にそれぞれの項目（本傳）毎に句の配列を比較する。ここでは『五燈會元』の文に對して他のテキストのマッチ數を取って増減の割合も計算する。表 2 の南陽慧忠國師の例にあるように『五燈會元』の南陽慧忠の項目は 361 句からなるが、『景德傳燈錄』の對應する項目は 400 句¹⁵⁾、『聯燈會要』は 794 句。その内『景德傳燈錄』の 195 句と『聯燈會要』の 48 句は『五燈會元』にマッチがある。

表 2 南陽慧忠國師の項目の句數とマッチング句數

五燈會元：南陽慧忠國師	361 句
景德傳燈錄：西京光宅寺慧忠國師	195 (400) 句
聯燈會要：西京光宅惠忠國師 凡二	48 (794) 句

14) こうした揺れが有るので表 1 の句數に関する數字には恣意的な側面が若干見られるが、全體の 0.1% に過ぎないので、ここでは無視する。

15) ここでは『景德傳燈錄』の卷五に有る「西京光宅寺慧忠國師」のみを對象としているが、卷二十八の廣録はこの句數に入れていない。

第三節 観察と所見

対象テキストの連続性（継承）と變遷を観察するのに複数のレベルがある。

一番高いレベルでは資料の目次などに見える並び方と表示を観察し、そこからどんな全體像が伺えるかを確認する。上記で述べた様に、各テキストの編集方針にはそれぞれの違いが有り、独自の立場を取っているものの、共通点もある。そうしてその交差に見えるのがその時点の禪宗の全體像を描く意思であると假定すれば、こうした違いからその全體像の違いを読み取ることは出来るはずである。この編集の意圖がはっきり表される事は少ないが、楊億は『景德傳燈錄』の序に次のように述べる：

「如此之類，悉仍其舊，況又事資紀實。必由於善敘。言以行遠，非可以無文。其有標錄事緣，縷詳軌迹。或辭條之紛糾，或言筌之猥俗，竝從刊削，俾之綸貫。至有儒臣居士之問答，爵位姓氏之著明，校歲歷以愆殊，約史籍而差謬。咸用刪去，以資傳信。〔…〕若乃但述感應之徵符，專敘參遊之轍迹，此已標於僧史，亦奚取於禪詮。聊存世系之名，庶紀師承之自然，而舊錄所載。或掇粗而遺精，別集具存，當尋文而補闕。率加采擷，爰從附益。」¹⁶⁾

「こういった部分については、全てもとのままでした。ましてや事實記録の役に立つことであれば、必ずよくよく述べるべきことである。言葉は遠くに伝えられるが、その爲に文節を使う必要がある。出来事を詳細に記録する事に意義が有る。しかし所々に混亂があったり、俗っぽい不明確など、こうした所は全て削除した。士大夫や爵位の有る方との問答の場合は年譜や本傳に矛盾が有る無しを確認して、歴史的な記録との差が有る場合はそれを削除して、それによて信用を高めた。(…)感應の證據や名所巡禮の記録に就いては、それは高僧傳の類に挙げているので、この禪宗の典籍に載せる意味が無い。ここでは法嗣の系統を世代別に名前を載せて、老師から弟子への傳達を記録する。しかしこの古い記録に曖昧なところや漏れが有り、別集が有る場合には、その爲に穴を埋める爲に資料を探して不足を補った。こうして文章をよりスムーズにして、これで利用價值が増えるだろう。」

他のテキストにも同じ様な編集動機が有ったかどうかははっきりとは言えないが、ここでその意圖が有った事を研究の假定として置く。

16) この序は『宋版 高麗本 景德傳燈錄』（禪學叢書之六、柳田聖山主編、中文出版社、京都 1984）収録の常熟瞿氏の鐵琴銅劍樓舊藏宋刊本を底本としている。

『景德傳燈錄』から『五燈會元』へ

対象テキストは皆、禪宗を連続性のある、老師から弟子への傳達があり、最終的に釋迦牟尼に歸する法嗣の系統に基づく傳統として認識する。その中に複数の、社會の資源に對して、或いは禪宗の中の影響力とリーダーシップに對しての競争關係を持つ法嗣系統が存在する。その爲、各テキストの中でその法嗣系統の相對的な重みを如何にして示すか、この約 250 年の間にはその重みに對してどの様な變化が見えるかが一つの問題となるだろう。

もう少し低いレベルでは各テキストの中それぞれ禪師の項目を比較し、上記の「重み」の表現として「分量」の増減が有ったかどうかを調べる。今回は『五燈會元』のテキストをベースにして、その前の五燈史からどんな文を採用したか、どんな文を削ったかを主な手掛かりとする。

最後に句のレベルではどんな句がよく使われているか、それを通して、どんな禪師の影響力が大きかったか、その影響力の幅と評判はどう変わったかも視野に入れる。

第四節 各法嗣の相對的な影響力の變遷

ここでは禪師の項目の分量、つまりその項目の「句數」を手がかりとして、まず高いレベルから見ることにする。各テキストは本文の大部分を慧能以降の「南嶽下」と「清原下」、つまり六祖慧能の「弟子¹⁷⁾南嶽懷讓と清原行思に分ける。時間と共に各宗の勢力は變わるので、この數値でそれぞれのテキストの編纂時点を現在としての狀況を測る。表 3-1 から表 3-6 までは各テキストの内部構造と「句數」としての重みを擧げている。

表 3-1 景德傳燈錄 句總數：77460

行	内 容	卷	句 數	%
1	古佛とインドの祖師	1, 2	3247	4.19
2	中國の祖師	3	2013	2.60
3	旁出法嗣と北宗	4, 5	5554	7.17
4	六祖慧能とその法嗣	6	1849	2.39
5	南嶽懷讓とその法嗣	7-13	17147	22.14
6	清源行思とその法嗣	14-26	37281	48.13
7	禪宗以外の古尊	27	2418	3.12
8	諸方廣語	28	3640	4.70
9	贊頌偈詩	29	1550	2.00
10	銘記箴歌	30	2761	3.56

17) 多くの研究者の禪宗に對する歴史的な考察に依れば、實際にこうした關係が有ったかは非常に疑わが、ここで歴史的な事實より禪宗での位置づけを重視する。

表3-2 天聖廣燈錄 句總數：4044

行	内 容	卷	句數	%
1	古佛とインドの祖師	1-6	4343	10.74
2	中國の祖師	7	1052	2.60
3	南嶽懷讓とその法嗣	8	2337	5.78
4	百丈懷海禪師語錄	9	2097	5.18
5	黃檗山希運禪師法嗣	10	882	2.18
6	臨濟院義玄禪師語錄	11	1775	4.39
7	南嶽下五世の法嗣	12-18	10537	26.05
8	清源下七世の法嗣	19-25	9694	23.97
9	南嶽下八世の法嗣	26	1463	3.62
10	清源下十世の法嗣	27-30	4413	10.91

表3-3 建中靖國續燈錄 句總數：52932

行	内 容	卷	句數	%
1	正宗門：インドと中國の祖師	1	1657	3.13
2	對機門：清原行思の法嗣	2, 3; 5, 6; 9-11; 15-18; 25, 26	24990	47.21
3	對機門：南嶽懷讓の法嗣	4; 7, 8; 12-14; 19-24	21151	39.96
4	拈古門	27-28	3194	6.03
5	偈頌門	29-30	1940	3.67

表3-4 聯燈會要 句總數：65017

行	内 容	卷	句數	%
1	過去七佛, インドと中國の祖師, 四祖旁出法系	1, 2	4123	6.34
2	五祖旁出法系, 六祖の法嗣	3	2483	3.82
3	南嶽懷讓とその下十七世の法系	4-18	31427	48.34
4	青原行思とその下十五世の法系, 又は亡名尊宿	19-28	23736	36.51
5	銘, 頌, 歌などの短編著者	29, 30	3248	5.00

表3-5 嘉泰普燈錄 句總數：50891

行	内 容	卷	句數	%
1	示眾機語	1-21	36314	71.36
2	聖君, 賢臣	22, 23	3424	6.73
3	應化聖賢竝拾遺	24	1544	3.03
4	廣語	25	2513	4.94
5	拈古	26	2111	4.15
6	頌古	27-28	1895	3.72
7	偈贊	29	1495	2.94
8	雜著	30	1595	3.13

表 3-6 五燈會元

句總數：125794

行	内 容	卷	句數	%	新項目
1	過去七佛, インドと中國の祖師	1	5810	4.62	
2	旁出法系と北宗	2	6027	4.79	4
3	六祖の法嗣	3	5762	4.58	
4	南嶽懷讓とその法系	4	6183	4.92	3
5	青原行思とその法系	5-8	24267	19.29	10
6	宋皇帝, 亡名尊宿	(6)	(0)	(0.00)	15
7	瀉仰宗 (南嶽下三世)	9	3718	2.96	6
8	法眼宗 (青原下八世)	10	7312	5.81	13
9	臨濟宗 (南嶽下四世)	11, 12	12640	10.05	9
10	曹洞宗 (青原下八世)	13, 14	13355	10.62	18
11	雲門宗 (青原下六世)	15, 16	14732	11.71	32
12	臨濟宗 (黃龍, 南嶽下十一世)	17, 18	10098	8.03	8
13	臨濟宗 (楊岐, 南嶽下十一世)	19, 20	15890	12.63	6

『景德傳燈錄』は「清原下」に屬する法眼宗の中で編纂されたので、こちらの方が有利になるのは意外ではない。しかし、「南嶽下」の法系を倍以上の差で下すのは豫想外であった。『景德傳燈錄』の出版から僅か18年にして編纂された『天聖廣燈錄』はそれに反發する。表3-2の3から7行と9行はすべて「南嶽下」に屬し、その合計は47.15%に對して「清原下」の8と10行の合計は34.88%に過ぎない。これは他にもよく言われている11世紀における臨濟宗の影響力の表れだろう。次の『建中靖國續燈錄』に二つの宗派の勢力が僅かではあるが、逆轉する。つまり表3-3では「清原下」の禪師は「南嶽下」を7ポイント程度上まわる。『聯燈會要』の方は逆に再び「南嶽下」が12ポイント程度上まわる。表3-5に見える様に、『嘉泰普燈錄』には資料の並べ方がやや異なり、巻毎にそれぞれの宗派を入れ、各世代毎に法系並べており、「南嶽下」、「清原下」の基準で分ける要素は若干弱くなっているため、ここで検討から除外する。最後に表3-6に『五燈會元』の状況を擧げている。ここには宋の細分化が目次にも反映され、宋末の5宗派も羅列される。しかし、比較の爲に二分化して計算して見ると「南嶽下」の4, 7, 9, 12と13行は合計38.6%に對して「清原下」の5, 8, 10, 11行は47.4%の結果になる。その時點は臨濟宗・瀉仰宗・雲門宗・曹洞宗・法眼宗を禪宗五家と呼稱し、臨濟宗から枝分れた黃龍派と楊岐派を合わせて七宗で有り、臨濟宗が優勢であるように見えるが、全體としては「清原下」の曹洞宗勢力の方が強い。

以上の様な變化は何が意味するかは、こうした表面的な分析では十分な理解を得られないが、今までの禪宗の直進的な發展には一つの疑問符をつける事になろう。今後はより詳しい検討が必要であると考えられる。

第五節 『五燈會元』に見られ變遷の全體像

(一) 資料が増加した禪師と資料が削減した禪師

上記に説明した方法で『五燈會元』とその前の五燈史を比較し、項目別の増減を記録した表を作成した。全體は2020行にのぼるので、ここで率の高い順の上から24行だけ表4に挙げる¹⁸⁾。この表では「率」は増加の倍率で、五燈史の中で一番資料の多いテキストが比較対象となっている。

複数の人物の資料を含む項目の「亡名〇〇」は『五燈會元』で大幅に増加する。それ以外にも曹洞宗の疏山仁禪師の弟子靈泉歸仁禪師は『景德傳燈錄』や『聯燈會要』には非常に短い項目があったので、増加の倍率が最も高くなっている。全體としてもこの増加率の高い禪師に曹洞宗（青原下）

の禪師が多い。

しかし「南嶽下」の禪師、例えば馬祖道一禪師の弟子、烏臼和尚がいる。こちらも『景德傳燈錄』に短い問答しかないが、『五燈會元』では『碧巖集』（1125）巻第八の第七五則に見える文が追加されているようだ。また洞山良价禪師、雪峯義存禪師、天臺德韶國師、雲門文偃禪師、玄沙師備禪師と曹山本寂禪師（何れも青原下）など、『景德傳燈錄』ですでに資料の多い項目を持つ禪師であるが、更なる追加分が大きい僧もいる。

『五燈會元』は臨濟宗の勢力強い13世紀の半ばに臨濟宗の本山に當たる杭州靈隱寺で編纂されたにも関わらず、増加分の多い項目全體として、やはり「青原下」の禪師が多い

表4 増加句数の最も高い項目

行	項目	ID	率	句数
1	靈泉歸仁禪師	WD13-055	7.5	120
2	亡名道婆	WD06-128	7.44	67
3	亡名官宰	WD06-126	6.2	62
4	洞山良价禪師	WD13-001	5.86	1119
5	雪峰義存禪師	C-08-01-1	5.72	846
6	能仁紹悟禪師	C-13-06-5	5.5	44
7	亡名行者	WD06-127	5	65
8	天臺德韶國師	WD10-002	4.77	993
9	雲門文偃禪師	C-09-01-1	4.17	1410
10	五祖法演禪師	C-13-02-1	3.96	804
11	雲蓋用清禪師	WD10-103	3.64	51
12	玄沙師備禪師	C-08-05-1	3.61	1071
13	曹山本寂禪師	WD13-002	3.57	902
14	簽判劉經居士	C-09-08-16	3.46	197
15	疏山匡仁禪師	WD13-004	3.43	466
16	烏臼和尚	C-05-07-26	3.28	59
17	紫陵微禪師	C-07-04-27	3.07	43
18	鄧州芭蕉和尚	WD13-070	3	15
19	雪竇智鑒禪師	C-21-05-1	3	21
20	南塔光涌禪師	WD09-014	2.71	57
21	船子德誠禪師	C-04-05-4	2.68	169
22	雲居道膺禪師	WD13-003	2.55	591
23	南禪遇緣禪師	C-08-04-21	2.54	33
24	仰山慧寂禪師	WD09-002	2.44	1081

18) 資料の全體は論文のデータ付録として zenodo.org で公開中。

『景德傳燈錄』から『五燈會元』へ

ようだ。

(二) 初めて項目を持つ人物

増加項目と別に全く初めて燈史に登場する人物も『五燈會元』に少なくない。合計 122 人の項目が新たに追加されているが、この大部分が第七卷以降に見える。表 3-6 最後の欄に追加項目の数を挙げている。六卷には宋皇帝、亡名尊宿、又は法系が不明の人物が見られる。ここには今までに禪宗のメンバーとして認識する事がなかった學僧の僧肇 (384-414)、或いは唐の詩僧貫休 (832-912) が極めて短い記述ではあるが、項目が立てられている¹⁹⁾。宋の皇帝としては宋太宗が『聯燈會要』に初めて登場し、『嘉泰普燈錄』に徽宗、孝宗、眞宗と高宗も挙げられているが、最後の二人は『五燈會元』には見えない。禪宗以外の人物は『景德傳燈錄』にも既に登場するが、そこでは本文と少し距離を置いて、付録の様な役割を持つ卷 27 に纏められているのに對して、『聯燈會要』以降、『五燈會元』も含めて、本文の中に見られる。

もう一つ興味深いのは、道教の全眞派に仙人として祀られる道士呂洞賓も卷六に黃龍晦機 (d 904-907) の弟子として法系に入れられていることである。この項目も初めて『嘉泰普燈錄』に見えるが、『五燈會元』もその大部分を採録する。

(三) 『五燈會元』に見えない項目

『五燈會元』以前の五燈史に収録されたが、『五燈會元』に見えない項目を表 5 に挙げた。全體としては『景德傳燈錄』の採擇率が一番高いが、『聯燈會要』以外の燈史も 9 割程度で殆どの項目は繼承されている。『聯燈會要』の状況は大きく異なる、ここは 3 分の 1 の項目しか『五燈會元』に見えない。上記の表 1 では『聯燈會要』の句数にあるマッチは 32% で比較的が高かったので、この差は驚くべきで有る。しかしこのテキストの構造

表 5 五燈會元に無い項目

タイトル	項目数	五燈會元に無い	%	繼承率
景德傳燈錄	967	65	6.7	93.3
天聖廣燈錄	338	30	8.8	91.2
建中靖國續燈錄	863	112	12.9	87.1
聯燈會要	710	449	63.2	36.8
嘉泰普燈錄	637	84	13.6	86.4
五燈會元	2012	—	—	—

19) 『景德傳燈錄』卷 27 「諸方雜舉徵拈代別語」にも貫休の問答の一部が見えるが、項目が立っていない。

は他の燈史と違ふし、『景德傳燈錄』と『天聖廣燈錄』に由來する所が多いので、句數の割合は高くなるだろう。何れにしても、五燈史を通して見ると、『五燈會元』の編集方針は「項目の中身を減らすが、項目そのものはなるべく繼承する」というように、目次をあまり削らずにささいな編集の方針であったに見える。

(四) 禪師の影響の「廣がり」

ここでもう一つの角度から『五燈會元』とその前の燈史を比較する。ある禪師の項目の中の文句は多くの場合は他の典籍の同じ禪師の項目にマッチする。それをここでは「自己」の項目にマッチすると呼んで、それ以外、つまり上記の方針では他の禪師の項目が連続性のあるマッチが有る場合は、それを「他人」のマッチと呼ぶ。「他人」のマッチが多い程その禪師の影響力の「廣がり」が大きいと考えられるので、この「他人」のマッチを手がかりに廣がり測る事を試みる。表6には廣がりの多い禪師24人を擧げている。ここに臨濟義玄禪師がトップになるのは、何ら驚くべき事ではない。しかしこの事は、「他人」のマッチが實際の影響力を測るのに使える手がかりである事を示している

表6 影響力の高い禪師

行	項目	ID	率	句數	自己マッチ	他人マッチ
1	臨濟義玄禪師	WD11-001	2.31	806	5	16
2	雲門文偃禪師	C-09-01-1	4.17	1410	3	14
3	洞山良价禪師	WD13-001	5.86	1119	5	10
4	曹山本寂禪師	WD13-002	3.57	902	4	9
5	雪峰義存禪師	C-08-01-1	5.72	846	2	9
6	釋迦牟尼佛	WD01-007	1.44	700	2	9
7	徳山宣鑒禪師	C-04-06-16	0.4	356	2	9
8	清涼文益禪師	WD10-001	1.19	652	2	8
9	巖頭全夔禪師	C-04-07-24	1.22	422	2	7
10	盤山寶積禪師	C-05-05-5	1	117	2	7
11	趙州從諗禪師	C-05-09-28	1.67	1066	4	6
12	天臺德韶國師	WD10-002	4.77	993	3	6
13	龍濟紹修禪師	WD08-139	1.17	230	3	6
14	徑山宗杲禪師	C-14-01-1	0.98	731	3	6
15	九峰道虔禪師	C-04-11-9	0.24	361	3	6
16	雙林善慧大士	WD02-057	0.52	217	2	6
17	昭覺克勤禪師	C-13-03-1	0.33	447	2	6
18	五祖法演禪師	C-13-02-1	3.96	804	3	5
19	汾陽善昭禪師	WD11-044	0.99	373	3	5
20	南院慧顥禪師	WD11-024	0.8	312	2	5
21	同安丕禪師	WD13-035	0.41	188	2	5
22	三祖僧璨鑑智禪師	WD01-037	1.47	196	5	4
23	風穴延沼禪師	WD11-037	1.04	774	5	4
24	疏山匡仁禪師	WD13-004	3.43	466	4	4

『景德傳燈錄』から『五燈會元』へ

と考えられるので、この計算方法の確認として使える。

終 わ り に

本稿はテキスト分析手法の一つを用いて、禪宗の燈史に見られる禪宗の變遷に就いて新しい知見を得る事を試みた。今回は「句」の単位を用いて、『景德傳燈錄』から『五燈會元』に至る各テキストの文面を比較した。この方法で数値化できるものと出来ないものがあり²⁰⁾ここで描いた結果も言うまでもなく、こうした数値化で得られた禪宗のイメージである事は強調する必要がある。つまり、他の方法でテキストの比較が行う場合、そこで得られた結果は多少の違いを見せるだろう。

また、今回の分析は主に禪宗の中の大きな対立の「青原下」と「南嶽下」を対象にして、この文獻の中でその變遷をどういう形で見えてくるのかを數字で示せば何かが見えてくるかという考察であるが、今回は全體の文獻を遠くから眺める、所謂「distant reading」に類する方法を使う事にした。編集上の具體的な方針、つまり同じ項目でどの様な變化があったのか、文章を時代に合わせて分かりやすくする傾向があるかはこの方法では見えて來ないので、それは次の課題の一つである。

『五燈會元』は五燈史の内容を纏めて編纂したもので、全體の9割以上を占す部分を今回の調査対象としたが、燈史以外の資料の由來は明らかにしていない。今後他の禪籍などを使って、燈史以外の資料を調べる必要がある。

20) 例えば上記に説明した比較のアルゴリズムでは「マッチ」の有る無しのみで判断する事にした。少し書き換えた文章は「マッチ」するが、もう少し変わると「ノーマッチ」になる。数値化の過程では「マッチ」と「ノーマッチ」の間に段階的な數値を使用する事も検討の餘地があり、少し違う結果が得られるかも知れない。